

極秘情報

五月のリヤドは、朝方で気温三八度、真昼で五〇度弱となり、ようやく灼熱の国と化した。

異常気象の続いた今年も、今は焼き付くような太陽の陽射しが全てを消し去り上空は一面の青だった。長くその下にいることは到底不可能だが、慎太郎はサウジらしい、からっとしたまばゆい陽射しを楽しんでいた。

原油価格は、米国における石油在庫の増加、ガソリンに対する供給懸念の解消、ドル価値の上昇などで乱高下を繰り返しながらも少しずつ低下していった。五月一八日には四七ドル強となった。

いつもの通り、植木とイブラヒムは乱高下の度に対照的な反応を見せていた。ただ、四七ドルと言った水準は長年続いた二〇ドル程度を大きく上回ったものだった。

植木は、相変わらずその異常な高値振りを指摘していた。そして、世界経済のためには早く四〇ドル以下になる必要が

あると繰り返し力説した。

イブラヒムは、低下傾向を嫌な気持ちで眺めていたが、相変わらずの高い価格水準には満足していた。

原油価格の低下を望む植木の願いは、皮肉にも彼の滞在しているサウジの王位継承問題の表面化により空しく消え去ることになる。

サウジの王位継承問題は石油市場における圧倒的な強気要因だったからだ。

いきなり五月一八日にサウジのサウド国王が死亡したという情報がイタリアから流れ世界を駆け巡った。

慎太郎は、その真偽を確かめるため各方面に聞いてみた。スルタンは笑いながら国王死亡の事実はないし、仮に死亡するようなことがあればテレビはコーランの朗読だけとなつてその他の番組はすべて放送中止となるなどと言っていた。確かに、植木も一九八二年六月にハリド前国王が死亡した時には、まさしくコーランの朗読が続きサウド現国王の哀

悼の辞、葬儀の様もテレビで放送されたと言っていた。

殆ど同時に、今度は、サウド国王の容態が悪化したとの情報がロンドンで流された。海外のメディアは、こぞってサウジの内部抗争を懸念する論調が主になって、これらの不確かな情報は原油価格低下の流れを一挙に逆転させ上向きに変えた。

糖尿病を抱えていたサウド国王は一九九五年に心臓発作で倒れて一時サード皇太子に国政を任せていたが、その後奇跡的に回復し国王に復帰した。

その後も眼の手術を受けたり様々な病気で入退院を繰り返したりしていたが、その都度、奇跡的に回復していた。まるで、不死鳥のような国王だったが、そのような不安定な健康状態だったし、なによりも八三歳と高齢であったことから世界はその動静に注目していた。

スルタンは、既にサード皇太子がサウド国王の役割を殆ど担っているので、例えば国王が死亡したとしても皇太子がスムーズに王位を継承するだろうから何等問題は無いと言って

いた。これは国内のあらかたの見解でもあった。

ただ、慎太郎は、この時、スルタンの対応に何故か落ち着きが見られなかったので言葉とは裏腹に何か問題を抱えているのではないかと気になっていた。あとからもう一度スルタンに連絡をとって見たが電話は通じなくなっていた。

サウジの王位継承・政治的安定性に対する海外からの懸念は根強かった。これは、一九八二年のハリド国王逝去の時も同じだった。この時は、サウド皇太子(現国王)とサード第二副首相(現皇太子)との間の角逐が取り沙汰されていた。確かに、皇太子が積極・活発であるのに対し第二副首相は控えめにして沈着冷静と極めて対照的だった。政治信条も、皇太子が開明改革派で親欧米だったのに対し第二副首相は保守派で親アラブと言われていた。

そして何よりも、母系社会であるサウジにおいて両者が異母兄弟であることが懸念材料だった。皇太子は政府の要職についているものが多いハイル家に属し第二副首相はジャマル家に属していた。

それから九日経った五月二七日に、CNNが突然サウ王国
王の入院を報じた。その中で、サウジ政府が緊急事態を宣言
し治安部隊全員に休暇中止を命じたと伝えた。このニュース
を受けて、同日には原油価格が五・八五ドルへと上昇した。
この時、慎太郎は、五月一八日に流れた国王逝去や容態悪化
のニュースが全く根も葉もないことではなかったことを悟
った。火の無いところに煙は立たないものだ。

この報道をきっかけにして、その後、堰(せき)を切ったよ
うにニュースが次々と流れ出てきた。

サウジの新聞はサウド国王の入院が単なる検査入院であ
り何等大きな問題は無いとするサウジ政府の公式発表を連
日しつこいほど次のように報じた。

五月二八日・サウジ王室、サウド国王が二七日夕方ファイ
サル国王特別病院に検査を受けるために入院したと公式発
表。サウジ高官が、サウド国王の健康状態は良好で通常の検

査を受けているだけと発言。同高官、サウジ政府が緊急事態宣言を出し治安部隊全員に休暇中止を命じたとのCNNの報道を否定。二七日にムバラク・エジプト大統領の見舞い電話を受けたサード皇太子が国王の健康状態は良好と回答。

二九日：王室、検査の結果、国王の健康状態は安定していると発表。今後も同じような検査が継続。サード皇太子、二八日に国王の容態を問い合わせてきたカルロス・スペイン国王、アブダラー・ヨルダン国王、マカティ・レバノン首相に対しサウド国王の容態は安定していると応答。

三〇日：二八日にナイフ内相が二七日に検査入院した国王の容態は、確実に快方に向かっていると発言。サード皇太子が、国王の容態を心配して電話をしてきたハタミ・イラン大統領、アルバシル・スーダン大統領、アサド・シリア大統領に対し容態は安定していると応答。

三一日：サード皇太子が三〇日の閣議で国王の健康状態は安定しており回復しつつあると発言。

このように問題無し、問題無しの連続だった。

その一方、六月一日の外電は次のように報じた。

「サウド国王は八三歳で金曜日に急性肺炎及び高熱のため危篤となり、急遽(きゅうきょ)入院した。同国王は一九九五年に心臓発作を起こし、それ以来サード皇太子が日々の政務を代行してきた。世界最大の石油輸出国であり沙漠のサソリ掃討作戦を展開しているサウジアラビアにおける国王の健康状態の悪化は内外に不安を与えた。それ以来、王族は国民を安心させるための声明を日々発表して来た。しかし、いずれも国王の近々完全回復の見通しについて詳細な内容を報告してはいない」

慎太郎は、この記事内容では世界の人々に不安を与えることにはなるのではないかと思った。

緊急入院とする外電の報道と、通常の検査入院とするサウジの報道の間には、天と地ほどの開きがある。この外電のコースを受け、同日の原油価格は五四・六〇ドルへと上昇した。その後もじわじわと上昇を続けることになった。

一方、サウジでは、国民を安心させるような記事がさらに

続いた。

六月一日付けのサウジの新聞は、見舞いに病院を訪れたナイフ内相が国王の健康が大きく改善していると語ったことを伝えた。また、トルキ第二副首相が国王は近々退院すると思つたと発言したことも報じている。

しかし、その後、国王退院のニュースが出ることは無かつた。そして、国王に関連するニュースはこれを最後にぱたりと途絶えてしまった。

慎太郎は、世界最大の原油埋蔵量を有する世界最大の石油輸出国における、この重大な出来事を注意深く見守っていた。この国で何か起こつたら、イラク、ベネズエラ、ナイジェリアとは比較にならない程の影響を石油市場に与えることになる。それは市場が最も良く知っている。既に、最初は噂さだけ、次には入院しただけで石油市場への影響が出ていた。

慎太郎は、五月一八日に電話で話して以来、連絡が取れな

くなっていたスルタンのことを気掛りにしていた。

国王の入院後も何回か携帯電話に連絡してみたが電源が入っていないとのメッセージが入るだけだった。何も無ければ良いかと気にしていた。

原油価格の高騰を受けイブラヒムは意気盛んだった。一方、植木は、もう手の施しようがないと言って意気消沈していた。とても三人で会って話をすると言ったような状況ではなかった。

イブラヒムはレジデンスを出たり入ったり忙しそうだった。恐らく原油価格が乱高下していたから情報収集、売り買い注文などで多忙だったのだろう。安い時に買い高い時に売るといふのは全ての鉄則である。しかし、先物では、高いものを売っておいて安いものを買ってもやはり儲(もう)かることになる。ただ、いずれにしても相場を見誤れば大きな損失を被る。イブラヒムには一瞬一瞬が真剣勝負だった。

そのような中、イブラヒムは一息ついてレジデンスのプー

ルにやってきた。

「やあ、慎太郎、やっとプールに来れるようになったよ。知り合いのプリンスの一人がロンドンから帰国してね。てんやわんやだった。彼はエクスレイズ・キャピトルとも付き合いが長くてロンドンでは石油取引でも大分儲けていたようだ。今回は父君に急に呼び戻されて帰って来たそうだけど恐らく王位継承問題絡みじゃないのかな。このサウジでは僕に石油取引のサポートをさせてもらおうと思っている」

まず、イブラヒムは慎太郎に得意げに喋った。

サウジのプリンスの数は四〇〇〇人と六〇〇〇人とも言われているが、プリンスと付き合えるということはめったにあることではないし得意になっても良いことだった。特にイブラヒムは自分が権力中枢に近いプリンスと知り合いであることを慎太郎に仄めかしたかったのだらう。ただ、これまでも自分が石油先物取引でプリンスをサポートして来たことには一切触れなかった。イスラムでは先物取引はご法度だからそれは当然の配慮だった。

慎太郎は彼なりに主なプリンスの動きを察知していたの

でイブラヒムのこれだけの話でそのプリンスが誰のことだか推測出来た。

「それは凄いな。ところで、君の言ったプリンスとはアブドルアジズ殿下のことじゃないのかい」

それを聞いてイブラヒムはまず大袈裟(おおげさ)に驚くと一息置いて言った。

「慎太郎こそ凄いな。凶星だよ。慎太郎も、あるいは極秘に知っていたのかもしれないけど、まだ公表されていないので内緒だよ。彼は駐英大使だったが、父君であるトルキ航空国防相に言われて密かに帰国したのだそうだ」

「そうか、やはりサウジに帰って来ていたのか。今回は随分急な人事異動で驚いた。駐米大使が駐英大使になるという玉突き人事だったから一体何があったのかなと考えていたところだよ」

慎太郎は改めてイブラヒムの情報入手の早さ、情報網の広さに驚かされた。

「まあ、彼等にとっても重大事項だね。特にハイル家は権力

中枢を占めているから、誰が王位を継承するのか、そして、新国王がどのような政策を掲げるのかは彼等自身の将来に密接に係わってくる。必死だよ。僕には原油価格がどうなるかしか興味はないけどね」

イブラヒムは、そう言いながら国王が死んだ場合の石油市場への影響を考えていた。

サウジでは、大体、サード皇太子がスムーズに王位を継ぐだろうと考えているが世界では必ずしもそのようには考えていない。それは、この間の国王死去の誤報と原油価格の上昇で実証済みである。もし、国王の死を人より早く知ることが出来れば、逝去後の政治的混乱、石油価格上昇を見込んで買いを入れ、一儲け、いや大儲けが出来る。

サウジ政府は検査入院と言っているが本当にそうだろうか、それを徹底的に調べる必要がある。イブラヒムはそう思っていた。

「そうか、イブラヒム、もし、国王の入院について何か情報が入ったら教えてくれないか」

慎太郎はイブラヒムに頼んだ。インド人はサウジで一五〇万人も働いているので、そのネットワークは膨大だし権力中枢にいる人物とも知り合いのイブラヒムには情報も早く入るに違いないと慎太郎は考えていた。

「いいよ、教えてあげるよ。ただ、この手の情報の入手はかなり難しいだろうね」

イブラヒムはそう応えた。

この時は後に自分がたまたま逝去に関する極秘情報を手することになるとは思いもよらなかった。

国王が変わるようなことがあれば石油相も変わる可能性がある。慎太郎はその面でも気が気ではなかった。折角スルタン、林の尽力で特命プロジェクトが良い方向に進んできているのに、それが、また振り出しに戻ったのではたまらない。

サウジ治安部隊によるテロリストの搜索は相変わらず熾烈を極め六月も各地で行われていた。そして、ほぼ、その度にテロリストとの間で激しい銃撃戦が繰り広げられた。

また、治安部隊もテロリストから攻撃を受けていた。

六月一日には、リヤド カシームハイウェイで車から銃撃されて警察官二人が軽症を負った。

六月中旬には治安部隊の幹部が自宅でテロリストに襲われ殺害された。自宅を襲われるというのは異例なことで、この事件に衝撃を受けた治安部隊は必死の搜索を行って二日後にはその犯人二人を射殺することに成功した。

一方、六月二三日には最重要指名手配者リストの内の一人がイラクで米軍の爆撃を受けて死亡した。その結果、残る最重要指名手配者の数は僅か二人へと減少した。また、このところ、大きなテロ事件も無かったので慎太郎は大分気が楽になっていた。

ところが、サウジ政府は、六月二十八日に、新たなテロリストのリストを発表した。この発表を見て、慎太郎は、テロリストの裾野の広さを改めて痛感した。ただ、この新指名手配者リスト中のテロリストは、これまでに殺害もしくは逮捕された最重要指名手配者の指揮下で活動してきた、その意味で二流のものと思われていた。

従って、慎太郎は、徐々にサウジ内のテロ組織が弱体化して来ているとの認識を強めることもできた。

同時に、サウジ政府は、これまで治安部隊が一〇〇人以上のテロリストを殺害したと発表した。また、テロリストにより少なくとも市民九〇人、治安部隊四〇人が殺害されたことも公表した。

さらに、テロ攻撃を阻止もしくはテロリスト逮捕に協力したものには賞金を用意したことも明らかにした。一人の指名手配者の逮捕に繋がる情報提供者には一〇〇万リヤル(約三〇〇〇万円)、複数の指名手配者の逮捕に繋がる情報提供者

には五〇〇万リヤル(約一億五〇〇〇万円)、テロの計画を阻止する情報提供者には七〇〇万リヤル(約二億一〇〇〇万円)ということだった。

発表から数日の内に、新指名手配者リスト中のテロリストの数は急速に減少していった。七月初めには、テロリスト一人が観念して自首し、新指名手配者リスト中の三人がイラクで戦死したことが明らかとなった。

また、リヤドの掃討作戦ではテロリスト三人が射殺され三人が逮捕された。この中には新指名手配者リスト中のテロリストが二人含まれていた。

慎太郎は、このような治安対策の進展に胸を撫で下ろしていた。ただし、慎太郎は、サウジにはテロリスト予備軍が一萬二〇〇〇人もいるとの情報を掴んでいたし、また、サウジ人が概ね反米感情を持っていてテロ行為そのものには賛成出来ないとしてもイスラム強硬派には同情的なものも多いことも知っていた。従って、決して油断はしていなかったし

テロの根絶は難しいだろうと見ていた。

国王入院のニュース後上昇を続け、七月上旬には六ードルを超えていた原油価格はIEAによる二〇〇五年石油需要見通しの下方修正、米国におけるディーゼル、暖房油の在庫増、ハリケーン・エミリーの進路変更に伴うメキシコ湾岸における石油、天然ガスの生産増などにより、ようやく低下を始め七月一四日には五八ドルを切った。

サウジではサウド国王退院のニュースがないまま一カ月以上が過ぎていた。病状に関する発表も一切無かった。

そんな中、イブラヒムは七月一七日にインド人のネットワークから貴重な情報を入手した。

これはイブラヒムに極秘中の極秘でもたらされたものでサウド国王が逝去したというものだった。

これを聞いたイブラヒムは、早速、アブドルアジズに石油

先物を大量に買うよう勧める決意をしてアブドルアジズ邸を訪ねることにした。大量に買いを入れる以上、この情報について確認を取る必要もあった。ただし、勿論、イブラヒムは確認を取れる筋合いの情報ではないことを十分に承知していた。アブドルアジズには買いを入れる理由を一方的に説明して買いを入れるかどうかだけを確認しようとした。

綱渡りだった。

アブドルアジズの邸宅は広大だった。昔から、サウジでは木の数の多さが富の象徴だった。現在(いま)は水も豊富になったから全体としての緑の豊かさが富の象徴だった。

これがサウジかと思われるほどの鬱蒼(うつそう)とした森に包まれた敷地内には大きな建物が点在していた。イブラヒムは、その、住宅というよりも宮殿と言った方が適切な建物群の内の最も大きな建物の前に愛車のBMW五五〇iを止め、その玄関へと続く広い石段の前に降り立った。

暗闇の中に広がる鬱蒼とした森の手前には外灯が無数に

並べられていた。その光で建物の前の広場は明るく浮き上がって見えた。

直ぐに二人の警護兵が車のところにやって来て一人がイブラヒムから車のキーを預かり一人が玄関へと案内した。玄関では侍従が待っていてイブラヒムを邸内に招き入れた。

邸内はシャンデリアがきらきらと明るく輝き、大理石の床、檀木(だんぼく)で覆われた壁、豪華な内装が施され、さながら中世の封建領主の館のようだった。

「アツサラーム・アレイコム」

アブドルアジズはにこやかな顔でイブラヒムを迎えアラブ式に抱き合った。

「アレイコム・サラーム」

イブラヒムは応えるとひときわ強く抱き返した。

アブドルアジズは自分の部屋にイブラヒムを招き入れると早速侍従に茶を持ってくるよう命じた。アブドルアジズの機嫌は良かった。付き合いの長いイブラヒムには言葉の端々でそれがよく判った。

イブラヒムは己の幸運に感謝した。今日はまかり間違えば機嫌を損ね大変なことになる話を持って来ていたからだ。

アブドルアジズは侍従がイブラヒムの前に茶を置くのを見届けると、侍従に向かって静かに手を横に振り人払いを命じた。

イブラヒムは侍従が外に出るのを見届けるとアブドルアジズが多忙なことを知っていたのですぐに用件に入った。

「大使殿下、お忙しいところ、お時間を頂戴し有難うございました。今日は、また石油先物の件でお邪魔致しました」

アブドルアジズはご機嫌で饒舌だった。

「イブラヒムにはいつも世話になってすまん。だが、おまえも知つての通りイスラムでは先物は厳禁じゃ。何のことやら……」

アブドルアジズの目は笑っていた。

「これは殿下失礼致しました。取引の件で参上致しました」
イブラヒムは素直に詫びるとそう言い直した。

「じゃが、おまえにパリでどうしても勧められて少しは勉強して関心は持つようになった。何よりも、これからは先物ですよという断定的な言葉は印象深かった。あれから、うるさく言つて来るアイスマンサクスのサイモンにもお前に勧められたことを伝えた。あやつははったりも多いが面白いことも言う。世界には六〇兆ドル(約六六〇〇兆円)近い年金ファンドが存在していてこれをちよつと石油市場に注ぎ込むだけで原油価格を吊り上げることが出来るなどと言って

おった。人のことをおだてるのも上手い。原油価格が上がれば殿下のお国のようなところは世界の金融市場に君臨出来るなどと言いおった。そのようなお金はやがて二〇兆ドル規模になりますと法螺を吹いておったわ。とにかく、そんなことでパリでお前に言ったのと同じようなことを言っただ。あやつはお前と同様勝手に取引を始めよった。お蔭で随分と楽しませて貰ったよ。それに、アラールからの賜物である石油の価値を正確に把握出来る効果もあった。今は先物もいろいろためになると思っている。今回は、急にロンドンからサウジに戻るようになったから特におまえに手伝ってもらった方が何かと便利だと思っている。ロンドンも良いが何と云ってもサウジからは距離があるし時差もある。ちよつと億劫(おっくう)になった。お前にはロンドンとの連絡もやって欲しいと思っている」

イブラヒムは、ピキンズの言葉を信じて、アブドルアジズにアドバイスをして来た。ピキンズの予想が当たって良かったと思った。

思いもよらず石油は余っていたが、イラク、ベネズエラ、ナイジェリア、そしてサウジアラビアと、次から次へと主要産油国で政治的混乱が生じ石油価格を押し上げる原動力になってくれた。しかし、結果が全てであり、利益を生めば評価は付いて来るものだと同信していた。

それに、このところの原油価格上昇で石油先物は旨みのある取引になっていた。ますますイブラヒムの方に風は吹いてきていた。

イブラヒムは、先物取引でアラアの賜物である石油の価値を高めることに大きく貢献したと勝手に自負していた。

「殿下、有難うございます。そう言って頂きますと、これからの大きな励みになります。ところで、殿下。本日は、大きな買い取引のお話を持ってまいりました。ご存知の通り、仮に今一〇〇枚買いを入れて、これが五ドル上昇したところで売れば五〇万ドルの利益が出ます」

とイブラヒムは話を始めた。

「それは、おまえの言う通りだが、それが確實なら一〇〇〇枚でも買つよ」

アブドルアジズは、笑いながらそう言った。

「そこで、このお話のキーは実はサウド国王のご逝去なのです」

イブラヒムが思い切って言うと、アブドルアジズの笑いは一瞬にして消え険しい顔に変わった。イブラヒムはすかさず話を続けた。

「殿下、叔父上のお話で恐縮です。実は、私は本日極秘ル―トで叔父上、国王がお亡くなりになったということを知りました。いつ貴政府が正式にご発表されるかは分かりませんが、諸般の事情を考えますと私の勘では今日明日中ということはないのではないかと思っています。従って、今は絶好の買いの時期と思います。殿下にサウド国王のご逝去を確認させて頂くことは出来ませんから単に大量に買いを入れて良いですかとお聞きしたいと思います」

イブラヒムが恐る恐るアブドルアジズの顔を窺うと、外交

官として名高かいただけあってもう冷静な顔に戻っていた。

アブドルアジズはイブラヒムの目をじっと見つめながら言った。

「イブラヒム、あまりデマに惑わされないように。叔父上は思ったより元気で退院も近いと聞いている・・・」

「ただ、その話と取引とは別だ。わしは、おまえに出来るだけ多くの買いを入れるよう頼みたい」

イブラヒムは、アブドルアジズの「退院も近いと聞いている」のくだりに微かな躊躇を感じ取りそれでサウド国王の逝去を確信した。また、先物の動きの全てを承知して細かなことは質問しないアブドルアジズを有り難く思った。

そして、イブラヒムも同じようにアブドルアジズの目をじっと見つめながら応えた。

「畏(かしこ)まりました。殿下、それでは、早速、来週市場が開きましたら、頃合いを見て一〇〇〇枚の買いを入れられるよう手配します。その後は、また、ご相談させて頂きます」

「ご存知の通りニューヨークではCFTC(取引監視委員会)が非当業者(大口投機家など)の取引を監視していますので、現物を取り扱う当業者(実業筋)の取引も上手く利用しながら買い進めてみます。分散するなどして出来るだけ多くの買いを不自然ではなく入れるように努めます」

イブラヒムは、アブドルアジズに自分がいかに慎重かつ有能なアドバイザーであるかを印象付けるために、それくらいのことには知っているであろうことも百も承知で敢えて話した。

アブドルアジズは満足気にただそれを聞いていた。そのアブドルアジズの顔色を巧みに窺いながらイブラヒムはアブドルアジズに恐る恐る次の話を切り出した。

「殿下、実は、もう一つお願いがあります。殿下の利益をより大きくより確実にするために殿下に発言して頂きたいのです。サウジが思い切って能力一杯まで原油を増産すると言っ頂きたいのです」

また、アブドルアジズの顔つきが陰しくなった。

「なにっ、おまえはわしに原油価格を一気に下げさせるつもりか。そんなことを言えば、サウジ政府、国民の反感を買ってしまっぞ」

そう言いながら、アブドルアジズは、イブラヒムの狡猾（こづかつ）な考えに唖（うな）らせられていた。

「お言葉ですが、未だに原油価格は五五ドルを超えています。ちょっと前までは二〇ドル台だったのではないのでしょうか。充分に高い水準にあります。確かに、サウジ国内では評判が良くないという面もあるかもしれませんが、しかしながら、サウジは世界経済を考えて高価格に反対するというのは国是ではなかったのではないのでしょうか、」

「それに、殿下、いずれ、原油価格はご逝去のニュースで反騰するのです。それでも、ご心配でしたら、アリ石油相にでも減産を臭わす発言をさせる手もあります。OPECをリードさせてOPECの減産という形ならもっと良いのですが・・・いずれにしましても一挙に原油価格を上昇さ

せることになりますから、世界からは非難を浴びることになるでしょう。そのような汚れ役は石油大臣にお任せになったらいかがでしょう。それに、こうすればダブルで利益が出ることになります」

アブドルアジズはイブラヒムの考えは充分に理解していた。

「イブラヒム、お前は本当に悪い奴だな」

一呼吸おいてアブドルアジズはゆっくりと喋り始めた。

「わしは、常々、サウジは世界経済の安定に貢献しなければいけないと言ってきた。勿論、ブレア首相にもそう言ってきた」、

「実は、わしが駐英大使を辞して英国を去るという噂を聞きつけて、フィナンシャルタイムズ、ロイターなどが、インタビューしたいと申し出て来ておる。丁度、サウジは世界の石油需要を満たすために全力を尽くすと言わなければいけないと思っていた矢先だった」

イブラヒムはアブドルアジズの逆鱗(げきりん)に触れずに済んでホツとしていた。強大な権力を持ったアブドルアジズは外向きの顔とは裏腹に気まぐれ暴君的なところが多分にあり周囲のものはいつもアブドルアジズの気を損ねないよう神経を尖(とが)らせていた。

「殿下、有り難うございます。全く仰せの通りです。世界が殿下の姿勢を歓迎してくれるのではないのでしょうか」

「イブラヒム、わしの方こそ礼を言うよ。いつも適切なアドバイスで助かる。そうそう、買いを入れる時には、サイモンとも良く連絡をとってより大規模な買いを入れるようにしてくれ。それに、彼らのファンドは膨大だから、イブラヒムの方で彼らの分まで引き込めればより確実より大規模に価格を動かせることになる」

「畏まりました。殿下」

イブラヒムはアブドルアジズの歡心を買えて宙を飛ぶほど嬉しかった。

そそくさと挨拶をするとアブドルアジズの部屋を飛び出た。

イブラヒムのBMWが勢い良くアブドルアジズ邸を出て夜のリヤドの街を疾駆するまでには、ほんの数分しか要しなかった。

原油価格は、七月二〇日にはIEAに続くOPECの石油需要見通しの下方修正、予想を下回る米原油在庫の取崩し、OPECの増産、それにアブドルアジズ駐英大使のサウジ大増産の発言を受け五五ドル以下へと急落した。米政府がサウジにおけるテロを警告するといった懸念材料も出たものの供給懸念解消の大きな流れを変えるには至らなかった。

イブラヒムは満を持して限月の変わった二二日に大量の買いを期近ものに入れた。

アブドルアジズには大儲けとなることを約して大金を投

入させたが実際はどうか誰にも分からない。神のみぞ知るだと思っていた。

それこそインシャーだ。

大金を投じた後、イブラヒムはいつもキリキリと胃が痛んだ。